



The Wuwan and Xianbei during the Stage of the Three Kingdoms:
A Study from the Perspective of Interaction and Changes

川本芳昭

KAWAMOTO Yoshiaki

はじめに

- ①前漢・後漢期の状況－属民化と傭兵化
 - ②後漢末・魏晋期の状況－自立化と融合の始まり
- 結びにかえて

【本文要旨】

烏丸と鮮卑については、既に我が国においては内田吟風、中国においては馬長寿の古典的研究をはじめとして、文献的には既に解明され尽くされている感がある。しかし、米文平による鮮卑石室の発見により新たな知見が加わり、また近年では魏晉、孫危などに代表される鮮卑墓葬の研究に見るような、考古学的観点からする鮮卑の研究も格段に進展してきている。それ故、そのような成果を踏まえ、当該時期の烏丸・鮮卑の問題について再検討することは大きな意味をもっている。

周知のように鮮卑諸族は南下を経て、中国との関わりを深めつつ、やがて中国の域内で鮮卑諸朝を建て、その中の一つである北魏は中国の統一王朝である隋唐帝国の母胎となる。また、これも周知のように秦代の長城の築城により、黄河文明の開始に発した華夏諸族の拡大は、長城という、それ以南の地を中国、以北の地を胡族の地とするうえでの具体的かつ象徴的なシンボルをもつことによって、一つの画期を迎えることとなった。こうした事態の出現によって、それ以前の時代の華北においてみられた華夷混在の状況は克服され、中国の周辺に四夷が存在するという時代を迎え、長城を南北の境とする華夷秩序は以後の時代に継承されて行くことになる。しかし、先に述べたように中国を目指して南下する北方諸族の動きはその後も継続し、遙か後世のモンゴルや満州族の例に見るように、中国と共にそれらの諸族の原住地をも包含した大帝国が建国されるようになる。このような観点に立つとき、本稿の表題に掲げた三国期段階における烏丸・鮮卑の問題は、中国史、あるいは東部ユーラシアの歴史全般とどのような関わりもつといえるのであろうか。

本稿は以上のような問題関心に立って、三国期段階における烏丸・鮮卑の移動、交流、それにともなう変容のもつ歴史的意味について考察したものである。

【キーワード】烏丸（烏桓）、鮮卑、匈奴、移動、夷狄、中国